トマトチック！乙女心

亜倉 暮亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トマトチック！乙女心

【コード】

N0611X

【作者名】

亜倉 暮亜

【あらすじ】

学園ヘタリアでよた化。親分子分で恋愛もの書いてみた。またしても勢いです。

一応片方は女体化してるので、BL注意はしていません。

ばちん。(前書き)

注意

- ・本格的に俺得小説。(前作以上に)
- ・だから中途半端に女体化。
- ・多分、なんかおかしい。

名前紹介

日本の普通の学校という設定なので、名前も日本人っぽいのを勝手に作りました。

- ・板里イタリ 陽乃ヒノ

ロマーノです。『ヒノ』は人名の『ロヴィーノ』が由来。姓は『イタザト』読みの方が自然ですが、字面が十分自然なのであえて『イタリ』のままです。女体化しています。

- ・板里イタリ 笛乃フエノ

イタリアです。人名の『フェリシアーノ』より『フエノ』。女体化しています。

・栖平^{スヘイ} 燈二^{トウニ}

スペインです。『スヘイ』は『スペイン』、『トウニ』は人名の『アントーニヨ』より。だから『トウジ』じゃなく『トウニ』です。余談ですが、子分の『陽』とこの親分の『燈』の漢字をちよつと意識してみたりしてます。

・富嵐^{フラン} 蓮^{レン}

フランスです。人名が『フランシス』で、国名と大して変わらないので、悩んだあげく『フレンチ』より『レン』。悪友の中で唯一女体化。

・土井^{トイ} 義流^{ギル}

プロイセンです。『ドイ』は言わずもがな、『ドイツ』より。『ギル』は人名の『ギルベルト』からです。

・土井^{トイ} 流美^{ルミ}

ドイツです。人名の『ルートビツヒ』より『ルミ』。『ル』しか合っていないのはこの名前の前身に、女体化じゃないバージョンの『流登』があるためです。

。 前述の通り、女体化しています。が、名前しか出てきません（（

以上、大丈夫な方はどうぞ。

ぱちん。

あたしの乙女心ってどうせ単純なんだろうな、と、板里陽乃はふと思った。鏡を前にして、前髪を斜めに撫でつけながら、あたしがあたしの乙女心を複雑だと感じるのは、あたしが馬鹿だからに違いない、と、やっぱりぼんやりと思う。

その前髪に、昨日もらった可愛いトマトのピン留めを添える。

それでも、と、まとまりそうにない上まとめる気もない思考を続ける。あ、とまと。と、陽乃は不意に『まとまり』という言葉の羅列が思いの外『とまと』に似てるということに気が付いた。

それはともかく。

それでも、と思考を再開する。複雑ながらも明快なところもある。ぱちん。ピン留めの音がやけに明朗にはじけた。

さしずめ今の所は。と、陽乃は、実際は背後にいるであろう人物に、鏡越しに視線を向けた。大きなまるい目、優しい茶色のふんわりしたロングボブ、白い肌、そしてなんととっても大きな胸の、美少女 陽乃の妹、笛乃。

顔の造形自体は似ている。でも陽乃は笛乃のような愛嬌は無いし、髪は短いし優しい色ではないし、肌は白くないし、あんなに、あんなに胸は無い。一つ違いとはいえ、姉なのに。

要するに彼女に陽乃は、色々と劣等感を感じているのである。まさに乙女的な劣等感を。それを陽乃ははっきり自覚していた。

どうも、最近そんなことばかり考えている。

と、笛乃が自分の方に向かってきた。鏡の中で目が合う。考えていたいたことは卑屈でも、別に後ろめたい訳じゃないのに、陽乃は思わず目を逸らした。

「姉ちゃん、そのピン留め可愛いね!」

もう高校生にもなるのにトマトのピン留めってどうよ、とも言わず（口に出さない以前に思ってもいないのだろうが）、ぱあと効果音のつきそうな笑顔で笛乃は陽乃を褒めた。ちなみに陽乃は我ながら思った。トマトってどうよ。しかし、これを自分に似合うと思っ
て買ってきた人がいる。そしてそれは間違いなく自分の乙女心をく
すぐるもので、陽乃はそれが少し悔しかったりもする。

ともかく、その人が似合うと思ってくれたのだから、

「あたりまえだ！」

と人差し指を妹の小さな鼻に突きつけた。笛乃はそんな姉に思わず
笑みをこぼす。

「そうだね。…じゃあ、流美来たし、わたしもう行くね！」

近付いてきた理由は、これを言うことだったのだろう。いちいち
言わなくていいってきますの一言でいいのにと、陽乃はいつも思
う。

間もなくして、がちりと戸を開ける音と、いつてきまゝすと間
延びた声が聞こえた。と。

「姉ちゃ〜ん！燈二兄ちゃん来てるよ〜！…じゃ、ほんとにいつて
きまゝす！」

予想外に付け足された笛乃の言葉を聞いて陽乃は、慌てて立ち上
がる。

そうして陽乃は、笛乃と二人暮らしのマンションの一室を飛び出
した。

「うわー、ほんま笛ちゃん可愛いなあ…」

扉のすぐ前に立っていたのは、先に笛乃が言っていた燈二兄ちゃ
んこと栖平燈二だった。おそらくさつき笛乃が去っていったのであ

自分で自分の心中が分からなくなることがある。多分それは乙女心の乙女的な何かなんだろうけれど、馬鹿なあたしには複雑すぎて分からない。と、陽乃は密かにため息をついたのだった。

『ん、おはようさん』

『よお蓮』

『ギヤー！まま守れこのや』あかーん！見たあかーん！』

『何さ、いいじゃん見るくらいは』

『お前には絶対陽乃のトマト見したれへん！！』

『トマト？…なんで義流ちゃんはいいのにあたしは駄目なの』

『義流は確かに可愛い子好きやけど、こんなんが手え出せる訳ないやん！』

『それひよつとして俺様貶してねえか？』

『まあ、確かにあたしなら手出しかねないけど』

『俺様を無視すんな！あと認めんのかよ！』

なんだこの連携プレー。

休み時間、トイレの前にある洗面台の鏡で、陽乃は例のトマトのピン留めを留め直していた。

ピン留めの角度に満足がいったところで、いつの間にか乗り出していた身を引き、ついでに全身をチェックする。

男勝りな口調とは裏腹に、陽乃は結構見た目を気にしたりする乙女らしさを持っているのだ。

(うん、変なところはない)

そして視線は自然、愛想のない顔(デフォルトで不機嫌そうなのだ)にいき、思わず下に逸らすとまた、コンプレックスである胸が目に飛び込んできた。なんだこの連携プレー。陽乃は思わず目を覆って、本日二度目のため息をついた。

「あ、見えた」

と、背後から突然声がした。驚いて振り向くと、そこには燈二のもう一人の悪友がいた。

端正な顔立ちに、長くてさらさらだけどゆるく波打つ金髪、そして嫌でも目に付く豊満な胸。 富風蓮。

この人に関しては、妹以上に勝てそうにない。しかし、妹ほどの劣等感を抱いている訳ではなかった。

ところで陽乃は、劣等感とはまた別な所で蓮を苦手としていた。苦手、というか、怖いのである。何か。

「お、おおまつ、近付くなこんちくしょー!!」

だからあからさまに拒否してしまう。もとい恐怖してしまう。

別に、特に何かしてくることは、基本的には無い(しばしば手を出そうとすることはあるが。蓮は『美しければ男でも女でも人外でも』な人種なのである)のだが、どうしても、怖ろしいと感じる。

いつもなら側に誰かがいるので、その誰かの後ろに隠れることができるし、蓮に会う時は必ず誰かのそばにいるようにしているのだが、今は一人で、そもそも蓮と会うことを想定していなかった。そもそも教室の位置関係的な事情で、他学年とは会いにくい学校内において、しかも教室と教室に挟まれたトイレという場所で、どうして三年生の蓮が通りがかかることがあるのか。

「陽乃ちゃんトマト可愛いねえ」

「うるせー！！ってか何でお前こんなところにいるんだよ！」

「え？まあ野暮用野暮用。それよりほんとに陽乃ちゃんは赤が似合うよね」

「うっ、お前に褒められても嬉しくななんかねえ！！」

「照れてるのがまた可愛いねえ」

可愛いけど、と、不意に声のトーンを下げて 蓮は囁くように言った。

「たまには素直になった方がいいよ」

その言葉に、陽乃は動揺する。

「なんで…」

「燈二が可哀想だ」

言葉が詰まる。

まあ、と蓮は陽乃の顎に指を添えた。徐々に顔が近づく。

「あたしなら気付いてあげられるから、陽乃ちゃんみたいな可愛いツンデレ、好きだけどね」

どっかの眉毛と違って、という蓮の言葉はもはや聞こえていなかった陽乃は、ほとんど無意識に、呼んだ。

「と、燈二っ！！！！助けるよこのやろっ！！！！」

「陽乃？って蓮んんん！！陽乃から一刻も早く離れやがれえええええ！！」

「うーん、なんでまたいつも、図ったようなタイミングでほんとに来るんだろっねえ」

陽乃に呼ばれたから来た、という訳では勿論ないのに燈二は、ベストタイミングで現れた。少し離れた所から全速力で駆けてくる彼を見て、基本事なかれ主義の蓮は何事もなかったかのように、ひらりと体を翻し「じゃ、アデュー！」と言って風のごとく去っていった。

「おせーよばっかっ！」

開口一番、陽乃はそう言っていた。呼んだら本当に来てくれて、助けてくれて、嬉しいはずなのに、陽乃はなぜか悪態を吐いていたのだ。なんでそんなヒーローみたいなんだ。いつもいつでも、必ず助けてくれる。

(嬉しい……けど)

それを不覚だと感じるのはあたしがひねくれているからなのだろうな、と陽乃は口をとがらせながら思った。が、頭をよぎる 『燈二が可哀想だ』。

「ごめんなあ、大丈夫か陽乃？どこも触られたりしてない？変なこと言われてない？」

「…別に大丈夫だよ」

「ほんまに？」

「しつこいぞこのやるー」

「なら良かった」

うん、良かった良かったと胸をなで下ろした燈二に、陽乃はなぜだか泣きそうになった。違う。なんで悔しいんだ。なんで素直に嬉しく思えないんだ。燈二が来てくれて、あたしはこんなに、安心したのに。あたしは言わなきゃいけないのに。

(…言えない)

「ほんまあいつ、見てくれだけはええねんから、男だけ誑かしといたらええのに。なあ陽乃」

陽乃は不思議でならなかった。こんな自分を相手に、どうして目の前のこの男は、機嫌を損ねることもなくあたしを可愛がるのか。昔から、いつもそうだ。ここまで可愛げのないあたしなんかを、心

配してくれた。守ってくれた。助けてくれた。トマトのピン留めをくれた。

(あたしは一度も、言ったことがないのに)

『ありがとう』を。

そして今も言えないでいる。

「あ、もう行かなチャイムなるわ！ほなまた後で！」

再び駆け出す燈二の、手を振る後ろ姿に、陽乃は不意に不安になった。

このままだと、いつか彼に嫌われるのではないかと。

すぐにでも愛想をつかれるのではないかと。

「あ……」

言いかけたものの、足が早い燈二の姿はもう既になかった。そもそも、今の「あ」は、ありがとうの「あ」ではない、意味のない感嘆詞だった。それにおそらく、本人を前にすれば、言うことはできないだろう。

素直になった方がいい。当たり前だ。分かっているのに、できない自分が齒がゆかった。

素直。

たとえば、陽乃は真っ先に妹を思い浮かべる。

素直で天真爛漫でしかも、可愛くて胸が大きくて、守ってあげたくなる。

その可愛さはやはり相当なものなのか、陽乃ほどの付き合いもないのに、燈二は笛乃のことも異常に可愛がっていた。諸事情で陽乃は、一時期燈二の家で暮らしていたのだが、その時に『笛ちゃんのが良かったのに』みたいな呟きを漏らしたのを、聞いたことがある。

そう、素直で可愛い方がいいに決まってる。

(それに比べてこのあたしは)

ひねくれてて傍若無人なのに、可愛くもなくて胸もなくて、守ってあげたくなるというより、凶々しく守れとこちらから言う。

なんて可愛くないんだらうか。

(このままじゃあ…)

陽乃は、にわかには焦りだす。

素直にならなきゃ、素直にならなきゃ、素直にならなきゃ。』

ありがとう』を言わなきゃ。

(燈二に、嫌われる…)

そう考えると、乙女心が締め付けられるような思いがしたが、燈二と乙女心にどういう因果関係があるのかは、陽乃には分からなかった。

『お前ほんま陽乃に手え出したら許さんで』

『分かってるわよー。大丈夫、あたしにもちゃん和本命の娘こがいるから』

『…ごめん俺今のセリフになんか二つくらいおかしいとこ見つけてんけどとりあえず、…おまえに本命?』

『本命の娘こがいるから』

『…へー、漢字変換ミスしてるで』

『本命の娘むすめがいるから』

『ああうん、分かった』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0611x/>

トマトチック！乙女心

2011年9月27日03時14分発行